



Henk Schulte Nordholt, ed. *Outward Appearances: Dressing State and Society in Indonesia*. (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde Proceedings 4). Leiden: KITLV Press, 1997, viii+371p.

「換言すれば、衣服はわれわれの社会的、文化的皮膚である」「それぞれの時代において、衣服、装身具、所作を介してなされる身体の出は、階級、地位、ジェンダーに関する強力な声明文である。身体表出における変化は、広範な社会変容に関わる種々の手がかりを与えてくれるのである」。H. S. ノルドホルト（1頁）とG. テーラー（85頁）による文章は、『外観——インドネシアの国家と社会を装う』に通底する問題意識を集約している。アナル派の歴史家が、しばしば「もの」を媒介として歴史を再構築しようとしてきたように、本書に収録された諸論文も、広い意味での衣服や装いを手がかりとして、インドネシアの国家や社会の理解に迫ろうとする。

歴史家ノルドホルト編になる本書は、1993年にオランダ王立言語文化研究所において開催されたワークショップの成果をまとめたものである。編者の序言によれば、ワークショップの目的は三つあった。一つは、オランダに収蔵されている植民地時代の膨大な写真コレクションは、これまであまり利用されることがなかったが、これを史資料として積極的に活用しようということである。二つ目は、従来の研究では、たとえばナショナリストの「内的本質」のみが語られ、彼らの「外観」、たとえば服装が語られることは稀であったが、こうした欠如を是正しようということである。これは、第一点とも関係して、必然的に視覚資料の利用を伴わざるをえない。そして、三つ目は、写真やスライドの多用によって、楽しいワークショップを開催しようということである（vii-viii頁）。視覚資料の再評価が、これらの目的を貫く共通の糸であるが、他の出版物と比較して、確かに本書にはたくさんの写真が挿入されている。なお、ワークショップ開催年から出版までに4年の歳月が経っていることからわかるように、ワーク

ショップの発表論文と本書にまとめられた論文は必ずしも同じものではない。大幅な書き直しや、一部で執筆者の入れ替えが起こっている。

編者の手になる序章を除いて、収録論文は以下のとおりである。章番号は評者が便宜的に付した。執筆陣には中国系インドネシア人（内容は個人的回想）と日本人が含まれているが、他は欧米人、なかんずくヨーロッパ人が中心であり、本書で扱われているテーマがインドネシア研究では新しく、とくにインドネシア人研究者自身によってはまだあまり意識化されていないものであることが想像される。

1章 Kees van Dijk, Sarong, jubbaqs, and trousers: Appearance as a means of distinction and discrimination.

2章 Jean Gelman Taylor, Costume and gender in colonial Java, 1800-1940.

3章 Rudolf Mrázek, Indonesian dandy: The politics of clothes in the late colonial period, 1893-1942.

4章 Elsbeth Locher-Scholten, Summer dresses and canned food: European women and Western lifestyles in the Indies, 1900-1942.

5章 Henk Maier, Maelstrom and electricity: Modernity in the Indies.

6章 William H. Frederick, The appearance of revolution: Cloth, uniform, and the pemuda style in East Java, 1945-1949.

7章 James Danandjaja, From hansop to safari: Notes from an eyewitness.

8章 Klaus H. Schreiner, The making of national heroes: Guided Democracy to New Order, 1959-1992.

9章 Jacques Leclerc, Girls, girls, girls, and crocodiles.

10章 Teruo Sekimoto, Uniforms and concrete walls: Dressing the village under the New Order in the 1970s and 1980s.

11章 Lizzy van Leeuwen, Being rich in Jakarta, 1994: A mother and two daughters.

上の題名のひとつひとつから推し量れるように、

本書所収の論文が取り上げる内容はきわめて多様である。論文は概ね古い時代から現代までの順に並べられているが、歴史的には17世紀から1994年にまでわたっており、その時間的幅は大きい。1章をみると、表題のサロン、ジュバ（長衣）、ズボン、それぞれ「原住民」、アラブ系ムスリム、ヨーロッパ人を象徴し、中国文化を除いて、インドネシア人の服装に影響を与えた3大文化要素を代表する。論文は、民族別ドレス・コードがバタヴィアに導入された17世紀半ばから19世紀末までの「服装の政治学」（3章のムラゼック論文の副題）を概観するとともに、1900年前後から始まるこの面での動態を、ナショナリズムの時代からスハルト期まで通観している。長袖のフォーマル着としてのパティック・シャツの発明・導入は、1970年代初頭、当時のジャカルタ州知事アリ・サディキンによるものである（73頁）等の指摘は、たんなる雑学の域を越えて、植民地後期および近年の背広・ネクタイの一般化と対比させて考えても興味深い。

1章とは対照的に、11章は、近年のジャカルタ富裕層の生活様式に関する記述である。著者が寄宿した金持ち家庭における母親と二人の成人娘の日常生活を、参与観察に基づいて活写している。高級マンションを次から次へと購入しては、自分のデザインで内装を整え、しかし完成後は貸すのでも住むのでもなく、高級コレクションのようにそのまま無住の館としておく母親。離婚のため子連れで家に戻った長女は、子供の面倒は一切メイドに任せ、食事中も家族と話をするよりは、母親や子供の前で携帯電話での会話に夢中である、など。1章とは時代的・時間的枠組みが異なるだけでなく、装いが出自や階級から大きく解放された現代では、服装以外に、生活様式一般を語る必要があることを感じさせる。

本書中で「装い」として扱われているものも多岐にわたる。2章から4章、6、7章は一般的な意味での服装を中心に論がまとめられている。それに対して、8章から10章では、国家としての装い、具体的には国民的英雄、聖パンチャシラ記念碑、村落レベルの独立記念行事などが論じられている。利用されている資料にしても、写真、挿し絵、広告、オランダ時代のヨーロッパ人女性向け生活案内書、国家記念碑、村落レベル建築物とさまざまである。

こうした多様な論文の鳥瞰的位置づけと理解を助けているのが、編者による序章である。各論文の簡単な紹介のあと、複数の論文に共通するいくつかのテーマを要領よくまとめている。評者なりの表現でその一部を紹介すると、「衣服、階層、権力」「国家、衣服、ジェンダー」「西洋化と服装」「植民地支配と衣服」「履物の政治学」「新秩序とユニフォーム、記念碑」「清潔さと支配」といったことになる。序章末の文献目録には、服装の文化的・政治的研究一般に関する文献が多数含まれており、これから「服装」の政治学、人類学、歴史学などについて知見を深めようとする読者には、参考になるところが多い。

本書の楽しみ方は、章を順序立てて追うよりは、序章を読んだのち、自分の関心の赴くままに、表紙と裏表紙の間を自由に散策することであろう。評者が個人的に興味を覚えた論文はいくつかあるが、そのうちの3つを紹介すると次のようである。

ロヘル＝スホルトゥン（4章）は、オランダ領東インドにおけるヨーロッパ人女性の生活様式を、ファッションと食事を主題としながら、とくに両大戦間期の変化に注目しつつ議論を展開する。交通通信手段の進歩によってアジア・ヨーロッパ間の距離が飛躍的に短縮されたことにより、東インド在住のヨーロッパ人女性人口が増大しただけでなく、ヨーロッパからの文物の流入が盛んとなることによって、東インドのヨーロッパ人女性の文化的志向は、それまでのサロン（腰布）やクバヤ（サロンの上に着る上衣）を着用し、米食を受容していた「東インド風」から、夏用ドレスと缶詰に象徴されるように、ヨーロッパ直輸入の生活様式へと変化した。ヨーロッパ人女性社会の「ヨーロッパ化」は、「原住民化」への恐怖の増大と裏合わせになっていたが、この過程における「ヨーロッパ社会」と「原住民社会」の差異化の増幅が、ある意味で、その後の独立運動を引き金とする植民地支配の崩壊をも準備するものであったと結論づける。この論文は、1960年代から1980年代にかけて、ジャカルタの日本人社会に起こった「日本化」を考える上でも示唆的である。

1945～49年のインドネシア独立革命との関係でもっとも有名な服装はといえば、革命を担ったとされるプムダ（青年）たちの服装・出で立ち、プムダ・スタイルである。長髪、髭面で、性的禁欲主義

を守り、ジャワでジャゴと呼ばれる猛者に擬せられる存在で、軍服、腰にはピストルという姿がよく想起される。ベネディクト・アンダーソンの著作などによって有名となった。「革命の姿形」と題されたフレデリック論文（6章）の目的は、プムダ・スタイルのイメージを、東ジャワを事例として再検討することにある。1941年の日蘭会商の決裂により、日本からの綿布輸入が止まった東インドでは、これ以降、布地の払底が甚だしく、そのためもあって革命時のプムダの服装はきわめて多様であり、プムダ・スタイルを当時の現実の服装と重ね合わせることは難しい、という結論である。興味深いのは、それにもかかわらず、美化されたプムダ・スタイルのイメージが厳然として人々の間に流布したことである。それだけでなく、このイメージの起源は、プムダをならず者として描こうとしたオランダ側のプロパガンダに求められることで、やがてそれが、むしろプムダを美化するイメージへと転化した点が面白い。フレデリックはプムダ・スタイルの実在性の否定に力点を置いているが、服装の研究は、当然のことながら、被服イメージの問題にも拡大するということである。

スハルト体制下の32年の間に、国家レベルにおいても地域社会レベルにおいても、景観、つまり景色の装いがインドネシアで大きく変わったらしいことは、多くの人が感じているところであろう。しかし、これまで、その変化の内容と性格を論じた人は少ない。関本照夫（10章）は、1970年代と80年代のジャワの同一村におけるフィールド調査をもとに、1960年代から80年代にかけてのジャワ村落の「装い」の変容を、独立記念日関係諸行事の変遷、村落リーダーシップの性格の推移、国家と村落社会との関係性の変化と関連づけながら考察する。論文タイトルにみるユニフォームとセメント壁は、体制との遠近関係を示す物差しとしてのユニフォームと、村落美観コンテストの副産物として村落内屋敷地すべてに出現した一律のセメント壁・門柱スタイルのことを指している。ユニフォームもセメント壁も、独立記念日に関わる行事との関係で、国家が村落社会に生みだした装いである。それらは、画一性、秩序、物理的・思想的清潔さなどを象徴している。スハルト体制の崩壊により、今後、村の装いには一体なにが起こるのか、是非いずれ、続編を読ませて欲しい論文である。

本書は、人によってさまざまな読まれ方がされる

であろうし、啓発のされ方もいろいろであろう。参考のため、本書が扱っていないトピックのいくつかを示すと、次のようになる。内容的にはほとんどの論文がジャワ中心であり、インドネシアの他地域に関する考察は稀薄である。女性については、ヨーロッパ人ならびに欧亜混血の女性に多くのページが割かれ、「原住民」女性に関する考察は少ない。中国系住民もほとんど扱われていない。子供や老人の服装が議論されることもない。たとえば、子供についていえば、1910年代と30年代のマレー語（のちのインドネシア語）読本の教科書にでてくる挿し絵をみる限り、両時代間の子供の服装にはかなりの違いがみられる。興味ある研究トピックに、今世紀初頭に確立したとみられる「インドネシア風ムスリム服」がある。男の場合、それは、礼拝時に身につけるベチ（黒い鍔なしフェルト帽）、長袖シャツ、サロン、サンダルに代表されるが、ベチそのものの創造過程とともに、ムスリム服の形成史も将来誰かがまとめて欲しいトピックである。末端社会において権威を代表するものとして立ち現れる役人や教師の服装の変遷、より最近では、村落部にまで定着したTシャツのもつ社会的意味、これまた村落部にまで浸透した女性のスラックス姿の含意なども、興味深いテーマであろう。

衣服に関する既存の研究としては、東南アジア一般について、少しではあるがリードが扱っている（Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, Volume One. New Haven, Yale University Press, 1988）。また、インドネシアについては、ニーセンの著作があり（Sandra A. Niessen, *Batak Cloth and Clothing: A Dynamic Indonesian Tradition*. Kuala Lumpur, Oxford University Press, 1993）、この数年、関本がジャワ・バティックの研究に従事し、さらには東南アジアの織物一般についての共同研究プロジェクトをも組織している。しかし、東南アジアについても、インドネシアについても、これまでのところ、研究の数は限られている。本書がよい刺激となり、衣服に関する研究が盛んになるとともに、今後は視覚資料の利用も、服装研究に限定されることなく、現在より一層重視されるようになることを期待したい。

（加藤 剛・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）